

A black and white photograph with a blue-tinted umbrella. The silhouettes of a man and a woman are shown from the back, standing close together under a large, open umbrella. The background is a blurred cityscape with buildings and a street. The overall mood is romantic and atmospheric.

妻と愛を
奪取した男

武者小路 胸熱

忠告しておこう。

世の中には知らなくてもいいこと、知ってしまったが故に自分を追い込んでしまうことが往々にしてある。余計なことには下手に首を突っ込まないこと。不審に思ってもあえて深追いしないほうがよい場合もあるのだ。

忠告もうひとつ。

スマートフォンを買い換えた時は、アプリのインストールや待ち受け画像や諸々の細かい調整は後回しにして、最初にパスワードでも顔認証でも指紋認証でも構わないから、まずは真っ先に画面ロックの設定を必ずやっておくこと。

他人に知られたくない秘密を持っている人は特に。

「ただいま」

その日、残業を終えた高原真一が帰宅した時、時計はもう23時を回っていた。

居間のテレビはつけっぱなしで、ソファでは妻の美帆がスマホを手に持ったまま寝落ちしている。小学4年生になる娘の小百合もすでに部屋で眠っているようだ。

食卓には、いつものように真一のための夕食が電子レンジで温めるだけですぐ食べられるよう用意されている。

「お、今日は生姜焼きか」

料理を温め終わった真一は缶ビールを開けた。

プシュッ！ その音で美帆が目覚ました。

「あ、おかえりなさい。遅かったのね」

「ごめん、起こしちゃったね。ちょっと会議が長引いちゃってさ」

「そうなんだ？おつかれさま。真ちゃんが食べてる間、先にお風呂入ってきちやおうかな。テレビ消しとくね」

「うん」

美帆のつくる生姜焼きは絶品だ。そう高くもない豚ロース肉を使っているのに味わい深い秘密は、隠し味にマヨネーズとコチュジャンを使っているからだそうだ。

空腹だったこともあつてももの数分で食べ終わり、一缶目のビールを飲み干そうとしていたその時、聞き慣れない奇妙な音が響いた。

ピロロン！ピロロン！

音の方向に目をやると、美帆のスマホがソファの下で光っている。

「あ、この音か。日曜日に機種変したばかりなのに、こんなところに置きっぱなしで踏んづけたらどうすんだよ」床のスマホを拾い上げた瞬間、SNSメッセージ通知の最初の一行が真一の目に飛び込んできた。

『今日の美帆さんも素敵だったよ。ありがとう』

真一は自分の目を疑った。と同時にそれが何を意味するかを一瞬で理解した。

妻は浮気をしている。

心臓の鼓動が激しくなり、顔は熱くなり、スマホを持つ手が震える。メッセージの送信者は WOODY。

メール本文や美帆と WOODY のトークルームでのやりとりを見ようか躊躇していたその

時、バスルームから美帆が出てくる物音がした。真一は慌ててスマホをソファの上に投げ出した。

「真ちゃんもお風呂どうぞ〜」

ドレッサーのある寝室から美帆の声が聞こえた。

服を着て髪を乾かして、居間に美帆が戻ってくるのは15分後ぐらいだろうか……。そんなことを考えているところに、体にバスタオルを巻いただけの美帆が慌てた様子でやってきた。

「私、スマホ置きっぱなしにしてなかった?」

「あれじゃないの?」

真一がソファの上を指差すと、美帆はひたたくるようにスマホをつかみ、すぐに寝室に戻っていった。

真一は美帆の浮気を確信した。

元々、お互いのプライバシーを尊重する真一と美帆は、特にルールをつくったわけでもないが、結婚前も含めて相手のスマホをこっそり見たりすることはしない。ハガキですら宛先が自分でなければ見ないようにしているぐらいだ。相手を信用しているというよりは単純にそれがエチケットという認識だった。

それなのにこんな形で、しかも知りたくもないことを知ってしまうとは。

「先に寝るね。お風呂冷めないようにどうぞ。おやすみなさい」

美帆はメッセージを見られたことには全く気づいていないようだ。

真一はしばらく震えと激しい鼓動が止まらなかった。「落ち着け、落ち着け」真一は必死で自分に言い聞かせた。

立て続けに缶ビールを3本飲み終えたところでようやく少しだけ冷静さを取り戻した真一は、頭の中でこの出来事を整理してみた。

あのメッセージと美帆の様子からわかったこと。确实ではないがかなり濃厚なこと。

・美帆は WOODY という男と浮気をしており、今日の昼間ふたりで会っていた

・当然肉体関係もあるだろう

・逢引は、週3で入っている美帆のパートが休みである平日の昼間。真一が仕事に、小百合が学校に行っている時間帯であろう。木曜は小百合がピアノのレッスンに行く日だから

消去法でいくと火曜日が怪しい。今日は火曜日。これは間違いなからう。

真一の働く不動産販売の会社は、間近にベイエリアの大規模マンションの新規販売を控えており、営業2部の課長である真一は明日も朝から幹部会議が予定されている。今夜も早く寝ないといけない。

真一夫婦の寝室にはベッドがふたつ。すぐ隣で美帆はすでにぐっすりと眠っている。

風呂からあがり、ベッドに横になっても、疲れているはずなのに、いつもはビール3缶も飲めば多少は酔ってくるのに、今夜は美帆の疑惑が頭の中に渦巻いて眠気が全くない。

もちろん、あのメッセージだけで美帆の浮気が確定したわけではなく、真一の思い過ごしである可能性もなくはない。しかし、打ち消したい気持ちとは裏腹に、しばらく前から、美帆がぐったりと疲れた様子でさっさと寝てしまう日が度々あること、美帆の方からセックスを誘ってくるのがなくなつたこと、美帆が少し痩せてきれいになったこと…疑惑を裏付けるような根拠もいくつか思い当たる。

結局、一睡もできないまま真一は朝を迎えた。

入社しても大切な会議の中身が頭に入っていない。疑っては否定し、否定しては疑い、疑心の無限ループに陥ってしまったようだ。「WOODYとは何者だ？いつからの関係？どうやって知り合った？これから一体どうするつもり？…」真一の中で次々と疑問がわき起り、何とかしてそれを知りたいと強く思うようになってきた。

その日は夕方に仕事が一段落したので、昨夜一睡もできなかった真一は早めに帰宅した。

美帆は全くいつものまま。真一はそれとなく探りを入れてみた。

「なんか昨日は疲れてみたいだね。どこかに行ってたの？」

「あ、昨日はお友達と上野にお買い物に行っただけだよ。歩いたから、そのせいかな？」

「お友達って？」

「岡崎さんって人。パートの同僚で歳も近くて仲良くしてるの」

「ふん、そうなんだ」

火曜日はWOODYと会っていたはずだから、美帆は明らかに嘘をついている。それなのにまるで用意していたかのような返答が即座に返ってきたことで、真一はますます確信を深めた。美帆本人に浮気を白状させるには、まずは自分が先に確たる証拠を掴まなくては

ならない。『絶対に真実をあばいてやる』真一はかたく決心した。

現時点で美帆が浮気をしていることはほぼ確実だ。まずは相手を特定するのが先決だろう。そのためには真一が疑念を抱いていることを絶対に美帆に感づかれないようにする必要がある。

これまでずっと信頼してきた妻の裏切り行為を知りながらも、何事もなかったかのような顔をして同じ部屋で毎日生活を共にすることは大きな精神的苦痛を伴うが、怒りや嫉妬、悔しさで胸をえぐられるような感覚が、真一の『真実をあばく』ための原動力となっていた。

美帆は月水金の週3回、駅一つ離れたドラッグストアで朝から夕方までレジ打ちのパートの仕事をしている。月に8万円程度の稼ぎは、小百合のピアノの月謝以外は今後の教育費として美帆が管理することになっているが、その一部はWOODYと会うときの小遣いにもなっているのだろうか。

教育費用に娘の小百合名義でつくった通帳を見ると、毎月欠かさず5万円が積み立てられていた。加えてピアノの月謝が月8000円なので、残りのお金は化粧品や美容院などで、自分のことに使っているのだろう。

探偵に美帆の素行調査を依頼する方法もあるが、自分でもいろいろ調べる方法はあるだろう。まずは真一が自分自身で慎重に証拠集めすることにした。

こうなったら手段を選んでいない場合ではない。美帆のスマホでWOODYとのやりとりを確認するのが手っ取り早いだろうと、美帆の入浴中にこっそり探ってみたが、すでに画面ロックが施されていてやりとりを見ることはできなくなっていた。あの日はたまたま機種変更直後で、まだ画面ロックの設定が済んでいなかったのだろう。もしかしたらそれをやるうとしている間に寝落ちしたのかもしれない。幸か不幸か、そのわずかなタイミングで真一がWOODYからのメッセージを見てしまったということだ。

また、真一がたまたま家でひとりになった時、何か証拠になるものはないかと美帆の服や下着、身の回りの品を物色してみたが、特別なものは何も見つからなかった。美帆はWOODYとの関係が絶対にバレないように、細心の注意をはらっているようだ。

ではどうするか。

ふたりの逢引は火曜日で間違いなさそうなので、そこを狙う手がある。ただ、どの火曜日になるかが事前にわからない。どのぐらいの頻度でふたりは会っているのか…。ひとつ言えそうなのが、美帆が生理の時は避けるだろうということ。それがわかれば少しは絞りこむことができる。

「昨日から会社を休んでいる女子社員がいるんだけど、その理由が生理痛なんだよ」

「生理って人によってかなり重い軽いの差があるのよ」

「美帆はそんなに重くないよね？」

「そうね。私は軽い方だと思うけど、始まってから終わるまで1週間ぐらいかかるかな」

「その女子社員はすごく不規則で本人も困ってるんだけど、美帆は周期は規則正しい方なの？」

「私はわりと安定してるよ。先月は確か18日からだったから今月はもうそろそろかな」

ということは、来週と再来週の火曜日はなさそうだ。けれどももし真一が自分で尾行するとしたら会社を休まなくてはならなくなるのもっと絞りたい。日を改めて他の角度から

攻めてみよう。

「今度の日曜日はモデルルームへの応援があるので出勤なんだ。その代休を取れるんだけど、美帆もパートが休みの日にもらおうかな。木曜はピアノだから火曜がいいのかな？」

「うーん、火曜日なら30日がいいかな」

「俺は23日でも来月の7日でもいいよ」

「7日は用事が入るかもしれないから私は30日がいいな」

「7日は出かけるの？」

「うん、あの、えと、まだ決まってるはいないんだけど、ほら、こないだ話した岡崎さんにまた誘われるかもしれないの」

その時、美帆がわずかに動揺した様子で一瞬目をそらしたのを真一は見逃さなかった。

「そう、わかった。じゃあ30日にするね。3人で夜は外食しようよ」

直近の火曜日と次の火曜日は美帆が生理中で逢引は無いと仮定すると、今の返事から推測するに、次にWOODYと会うのは7日が濃厚だ。5日の日曜日に美帆が美容院を予約したと言っていたのも逢引に関係があるのだろう。

7日は朝から雨が降っていた。会社に行くときに出かけた真一は、近くのコンビニのトイレで、家を出る時に着ていたレインコートを前日会社帰りに買ってきたものに着替えるはずぐさま戻り、マスクを着け、真一家の住むマンションのエントランス前の、道路を挟んだ反対側の死角となるポイントで待ち伏せをした。

しばらくして、まずは小百合が小学校に出かけて行った。それから約10分後、マスクをした美帆が出てきた。『思った通りだ』真一は自分の脈が速くなっていくのを感じた。

傘で顔を隠しながら、真一は美帆の後をつけた。美帆は駅に向かうようだ。『まるで俺、ストーカーだな』何かに取り憑かれたように真一は美帆を追った。

通勤時間帯の駅は混雑していたが、美帆が比較的目につきやすい明るいワインカラーのレインコートを着ていたのは好都合だった。見失わないように、見つからないように……。もしもここで美帆に見つかったら、もう二度と証拠を押さえるチャンスはないだろう。

美帆は恵比寿駅で降りて山手線に乗り換えた。『一体どこへ行くんだ?』と思うまもなく美帆は2駅先の五反田で降り、そのまま小走りでホームの端に向かって行った。そしてあの男を見つけるとその腕にしがみついた。

「はっぴが WOODY か…」

その男はスラリと背が高く地味だが小綺麗な服装でマスクをしており、遠目からはあまり若くないように見えた。真一は心臓をバクバクさせながらふたりの写メを撮った。『押さえたぞ。こいつが WOODY か! こいつか!』と心の中でつぶやきながら。

合流した美帆と WOODY はまるで恋人同士のように手を繋ぎ、腕を組み、東口から外へ出た。5分ほど歩いた相合傘のふたりはラブホテルの前で立ち止まり、一言二言言葉を交わすとその中へ入っていった。

傘を投げ出し、物陰からその様子を写メに撮っていた真一はもう雨でずぶ濡れになっていた。『よし、これが動かぬ証拠だ』

30分後、真一は渋谷のネットカフェの一室にいた。個室の壁にもたれ、さっき写した写真をぼんやり眺めながら真一はつぶやいた。

「なんだよ、ジジイじゃないか」

スマートフォンで写した写真を指先で拡大すると、髪には白髪が混じっているように見える。マスクをしているのはつきりとはわからないが、おそらく WOODY は50代、それ

も後半だろう。そしてその隣で嬉しそうに WOODY の腕にしがみついている美帆の姿を見ていた真一の目からはポロポロと涙がこぼれた。怒り、悔しさ、虚しさ、嫉妬、自己嫌悪：様々な感情が入り混じって後から後から涙がこぼれた。そしていつの間にか真一はそのまま眠ってしまった。

どのぐらい眠っていただろうか。ネットカフェのコインランドリーで濡れた服を乾かし、そこを出る頃にはもうすっかり雨はあがり、外は暗くなり始めていた。

やけ酒でも飲みたい気分だが、酔った勢いで美帆にこの話をしてしまうのはまずい。実際の浮気現場をおさえ、疑惑が事実が変わった今、自分はどうすべきなのかすっかり考えてから行動する必要がある。美帆と話すのはそれからだ。

あてもなく渋谷の街をふらふらとさまよい時間をつぶす。こんなときは普段の何倍も時計の針の進みが遅く感じる。重苦しい数時間をなんとかやりすごし、真一が帰宅したのは23時を過ぎていた。

「遅くまでご苦労さま。冷蔵庫にお刺身が入っているから食べてね」

いつものように食卓の上には真一の夕食が用意され、メモが添えられていた。

美帆も小百合も先に寝たようだ。美帆が時々ぐったり疲れ切った様子で早く寝てしまう理由を、真一は今日はつきりと理解した。

美帆の浮気は突き止めたが、その後の日常生活に変化は一切ない。言い換えれば、もし真一が美帆の浮気に気づかなければ、全て何事もなく毎日を過ごしていただろうということだ。もちろん将来のことはわからないが、少なくとも今しばらくは。

7日以降、真一の関心は WOODY についてもっと詳しく知りたいということに移った。どうやって知り合ったのか？美帆とはいつからの関係なのか？ WOODY の家庭や家族は？ WOODY が若いイケメンでもなく、遊び人風のオヤジでもなく、地味な初老のおじさんだったことが逆に真一のプライドに深い傷をつけた。

二日後、真一は勤務時間中にも関わらず、仕事の合間を利用して美帆の勤めるドラッグストアに来ていた。美帆がこの店に勤め始めて約3年になるが、真一が訪れるのは初めての

ことだ。毎週木曜日は小百合のピアノのレッスンの付き添いで美帆は出勤していないので、店に真一を知るものはいない。

「何かお探ですか？」

落ち着きなくキョロキョロしている真一に品出しの手を止めて声をかけてきたのは、40代前半ぐらいの、感じのいい女性店員だった。名札には「おかざき」と書かれている。『この女性が偽のアリバイに登場した岡崎さんだな。実在したのか』と真一は直感した。

「あ、ちょっと、疲れ目に効く目薬を…」

目薬売り場の前まで真一を案内してくれた彼女に、ひとりの快活そうな男性が声をかけた。

「岡崎さん、レジお願いします」

「はい、店長」

と、その『店長』という言葉で、真一はあることを思い出した。

美帆がこの店に勤めだして1年ほど経過した頃だったか、当時の店長が他の店に異動になるとのことで、美帆がその送別会に出席したことがあった。その夜、美帆は珍しくかなり酔っ払って帰宅したため真一の記憶にしっかり残っていたのだ。

《40代の疲れ目に！》と大きくパッケージに書かれた目薬を適当に手に取りレジに向かうと、ちょうど岡崎さんの列にあたった。

「店長さん、替わられたんですね」

「あ、林店長ですか？もう1年ぐらい前ですけど」

「あ、そうそう。今、林さんは？」

「確か品川の方のお店に異動になったって聞いてますよ」

「品川のどのお店ですか？」

「そこまでは…ちょっと」

会計を済ませ、店を出るやいなや真一は携帯で品川区の店舗を検索してみた。4店あった。居てもたってもいられなくなった真一は、その足で品川方面に向かった。

二人が密会していた五反田も品川区だ。そして林という名前とWOODYの関連性も気になる。WOODには「木・森・林」といった意味がある。真一は確信に近い感触を得た。

戸越店、大森店、3店目の八潮店に着いた頃はもう日は傾き夕方になっていた。

「間違ふな。WOODYだ」

WOODY こと林は、ちょうど店の入口から入った正面に、アルバイトと思われる若い男性店員と栄養ドリンクの特売用のコーナーをつくっている最中だった。真一は何食わぬ顔で彼らに近づくと、林を観察しながら、こっそりその姿を写メに収めた。

「あ、そっち、あと5段積んでみてください」

「わかりました。店長、こんな感じですか？」

五反田での印象通り50代の後半だろう。年下の若いアルバイト店員に対しても終始敬語で接している。近くで見た印象は、背が高いが特別イケメンというわけでもない普通のおじさん。ただ物腰が柔らかく人当たりは良さそう。と、その時、

ガシャーーン！

アルバイト君が1ダース入りのドリンクの束を落としてしまった。びんのガラスが割れ、中のドリンク剤があたりに飛び散った。ちょうど近くに立っていた真一のもとに林が飛んできて言った。

「お怪我はありませんか？服は汚れませんでしたか？」

対面で見た林は、髪には幾分白髪が混ざり、優しい目をした初老の男であった。

「いえ、大丈夫」

「よかったです。大変申し訳ございませんでした」

そこへ申し訳なさそうな顔をしたアルバイト君がやってくる。

「すみません、手が滑って…」

「今野君も怪我は無いですね？バックヤードからすぐモップと雑巾とチリトリを持ってきてください」

「は、はー！」

「お客様、大変失礼いたしました！」

林は大きな声で店内の客に向かって騒動をおわびし、一礼した後、アルバイト君が持ってきた雑巾で床を拭き始めた。

「君はそのモップで台の下を拭いてください。割れたガラスに気をつけて」

「はー」

「ごめんね、今野君。4段にしとけばよかったね」

テキパキと掃除を終えた林は店内の客に『お客様、大変おさわがせして申し訳ありませんでした』と再び声をかけ、やがて栄養ドリンクの特売コーナーは完成した。

その様子をずっと眺めていた真一に気づいた林が、真一の元にやって来て言った。

「お客様、栄養ドリンクをお探しですか？」

林の思わぬ行動に真一は焦った。

「いや、あの、最近、目が疲れやすくて…」

「ああ、そうですか。目薬売り場はこちらです」

林の案内で目薬コーナーにやってきた真一に林は言った。

「この商品はお値段も手頃で、最近よく売れていますよ」

手渡された目薬のパッケージには《40代の疲れ目に！》と書かれていた。

店を出た真一の上着ポケットには同じ目薬がふたつ入っていた。

『なんなんだよ、あいつ…』

真一は、店で見た林の的確で素早いトラブル処理と、自分と同じ管理職としての部下への対応に共感を禁じ得なかった。人の女房に手を出した、この激しい怒りをぶつけるべき対象者は、とことん嫌なクズのような男であってほしかったのに、真一の胸の中に小さな敗北感のようなものが芽生えていた。

会社に戻り、残務を終えて家路についた真一は、たかぶった気持ちを鎮めながら、今後の自分や家族について考えてみた。

真一が「離婚」の可能性を考えが及んだのはその時が初めてだった。

真一が全てを知ったことに気づいていない美帆は、その後も今までと全く同じ様子で、一家は何のトラブルも無いかのような毎日が続いていた。

美帆は浮気していることを隠し、真一はそれに気づいていることを隠している。はたからは一見幸せな家族生活を過ごしているように見えても、それはお互いが隠し事を持った見せかけの幸せを演じているだけなのだろうか。

しかし、たとえ偽りの幸せであつても、ふたりが隠し通すことで維持できるのならば、もつと言えは真一さえ知らないことにすれば、下手に表面化させて家庭を破壊させるよりずっとマシなのではないか。いや、それはあり得ない。自分だけが苦しんで、不貞を働いている美帆や林に何の罰も与えられないのはあまりにも不公平だ。

様々な考えが真一の中で錯綜していく。自分がどうすべきなのか、混乱した真一自身わからなくなっていた。

「ちょっと出かけてくる」

土曜日に真一が向かった先は、ネットで評判の離婚案件の実績が豊富な某弁護士事務所であった。これまでのいきさつを聞いた弁護士は真一に言った。

「もしあなたが離婚をお考えなら、このケースの場合、法的には何の落ち度もないあなたが圧倒的に有利ですね。娘さんの親権獲得も主張しやすいですし、相手男性に慰謝料を請求することも可能です。奥さんに対しても慰謝料を請求できます。その場合、財産分配時に相殺されるのが一般的ですが」

「そうですか」

「一つ確認させてください。高原さん、あなたは離婚したいのですか？」

「そ、それが…」

「あなたの苦しい気持ちはとてもよくわかります。言い出しにくいことでしょうが、まずは奥さんとじっくり話し合ってください。そして、最初から離婚ありきではなく、ご家族

にとつてどうするのが最善なのか、まずはあなた自身が決断することが大切です。感情的になって奥さんや浮気相手に罰を与えるとか復讐するとかではなく、これから家族が幸せになることを最優先に判断してください」

帰路の途中、真一は考えた。

『俺自身はどうしたいのか…。浮気の実事を美帆に突きつけて林と別れさせる？それは可能かもしれない。ただ、別れさせても夫婦の間にしこりや不信任は残るだろう。それでも知ってしまった以上、このまま黙ってふたりに関係が続けさせるわけにはいかない』

ある金曜日の夜、意を決した真一は美帆に切り出した。

「美帆、話したいことがあるからテーブルのところに来てくれる？」

「なんの話かな？」

真一がこんな改まった形で話そうなんて美帆に言ったことはこれまで一度もなかったのに、やはり美帆は真一に気づかれているとは思っていなかったようだ。

「あれこれ問いたただすのは俺も辛いから端的に言うよ…。林と別れてくれ」

一瞬で美帆の表情が凍りつき、もうそこに言い逃れの余地がないことを察した美帆の肩は小刻みに震えていた。

「いつ、いつから気づいていたの？」

「先月の7日だよ。雨の日。五反田で見た」

「そうなんだ…」

しばらくの沈黙の後、全てを知られてしまったことを悟った美帆の目から涙が流れてきた。

「ごめんなさい、真ちゃん…」

「うん。だから林と別れてくれと言ってる」

そこからまた長い沈黙が続いた。美帆がすぐに腹をくくって別れることを約束すると予想していた真一は、美帆からそういう言葉がなかなか出てこないことにだんだんと苛立って来た。

「なんですぐに別れると言わない？家庭を壊したいわけ？」

「壊したくない…」

「じゃあ、林と別れるしかないだろ。何なら俺が八潮に乗り込んでもいいんだぞ」

「それだけはやめて！林さんに迷惑かけたくない」

泣きながら美帆が訴える。

「何言ってるんだ？俺や家族に迷惑かけてもいいけど、林にだけは迷惑をかけたくない？一体どういうつもりなんだ？」

「林さんは悪くないの。私が悪いの。林さんは悪くない」

「人の女房に手を出しておいて悪くないわけないだろが。ジジイのくせに！」

必死で林をかばおうとする美帆の態度に、真一も興奮して声が大きくなってくる。

「確かに人当たりは良さそうに見えるけど、実は人の女房にちよっかい出すエロジジイじゃないか。そもそもヤツにも家庭はあるんだろ？」

「真ちゃんは林さんに会ったことがあるの？」

「ある。とは言っても、単なる客と店長としてだけだな」

「そういうことね。林さんはひとりなの。バツイチ。別れた奥さんとの間に、大学生の娘さんがいる」

「ああ、そうかい。でも独身だからって人妻に手を出してもいいってことはないだろが。」

美帆はエロシジイに遊ばれてるんじゃないのか？」

「林さんはそういう人じゃない！私の方からこういう関係を望んだの」

「美帆の方から？美帆は俺に何か不満でもあるのか？」

「…」

「いいからはっきり言ってみろよ。何が不満なんだ？」

美帆は林との出会いから交際に至る経緯を話し始めた。

美帆がパートを始めた時の店長が林で、最初は普通に店長とパートの関係だったが、2年ほど前に、ある年配の主婦がパートとして入って来た頃から林と美帆は親密になり始めたそう。三浦というその年配の主婦はトラブルメイカーで、店長に相談なく強引に勤務時間の交代を押し付けたり、その場にはいないパート仲間の悪口や根拠のない噂話を流したりして、店の雰囲気が悪くなってきたそう。人からの頼まれごとを断るのが苦手な美帆は、特に迷惑を被っており、ある時林に相談した。

林もすでにトラブルは承知しており、三浦に度々注意はしていたそうだが、改善が見られなく困っていたとのこと。その後、美帆が店長に告げ口したと思い込んだ三浦からの美帆

に対する嫌がらせが激しくなり、美帆は再び林に相談した。

「本当にごめんなさい。僕の言い方が悪かったのかも知れない。まさか三浦さんが高原さんに対してそういう態度に出るとは思いませんでした。もうこの際、ここまで店の人間関係をひっかき回した三浦さんには辞めてもらうことにします」

話の途中から泣き出してしまった美帆に林は言った。

「心配しないでください。もし、万一店を辞めた後も何らかの形で三浦さんが嫌がらせを続けるような場合は、必ず僕が高原さんを守りますから」

その後、店を辞めた三浦から美帆が嫌がらせを受けることはなかったが、それまで何度も個人的に相談しているうち、林の誠実さと優しさに、美帆はどんどん惹かれていった。

それからしばらくして、林が八潮店に転勤になることが決まった。

「林店長って異動になるの？」

「高原さん、知らなかったの？今月いっばいだって。品川の方のお店に行くらしいよ」

美帆は林が真っ先に自分に知らせてくれなかったのが不満だった。

「林さん、転勤するんですか？」

「はい。来月から八潮店の店長です。ここには今、埼玉の店舗にいる若くて元気な店長が来ることになってますよ」

「そんなこと、何で私に一番最初に教えてくれなかったんですか？」

「えっ？」

「もういいです」

林の送別会で痛飲した美帆は、泣きそうになるのをこらえるのに必死だったようだ。会の終わり際、林は人に気づかれないようこっそりと美帆にメモを渡した。

《いろいろありがとう。何か困ったことがあったら、いつでも連絡下さい》
メモには短いメッセージと携帯番号が書かれていた。

新しい店長が赴任してきたその夜、美帆は林に電話した。

「林さんですか？高原です」

「ああ、おつかれさまです。新しい店長はどんな感じでした？」

「柳沢店長は林さんの言っていた通り、元気で明るい人ですネ」

「僕は柳沢君が入社した頃から知ってますけど、真面目でとてもいい人ですよ。お店にもすぐに馴染むと思います。で、今日はどんな用件ですか？」

「用件がないと電話しちゃダメですか？」

「え？そんなことはないですけど…僕はともかく、高原さんが人から誤解されるようなことがあってはいけませんから」

「そんなのもうお店も違うんだし、私と林さんが黙っていれば誰にもわからないことじゃないですか」

「まあ、そうですね、やっぱり…」

「私、林さんがいなくて寂しいです…」

それからふたりは時々会うようになり、最初はお茶や食事だけだったのが、何度目かのデートから深い関係になったそうだ。真一は美帆の話に嘘はないと感じた。

「結局、林も美帆と深い関係になるのを拒まなかったということだろ？」

「真ちゃん覚えてる？前に小百合が学校でいじめに遭ってるって相談したこと」

「覚えてるよ。あの時、俺は猛烈に仕事が忙しくてあんまり話を聞いてあげられなかった」

「そう。あの時、私はすごく心細かった。担任の先生は、小百合をしばらく休ませるよう
に言ったんだけど私は腑に落ちなかったの。林さんに話したら『いじめた子は学校で楽し
く過ごしてるのに、被害者である小百合ちゃんが学校に行けないなんておかしい』って、
先生に手紙を書いてくれたの。それでしばらくの間、いじめた子が別室での個人指導になっ
て、小百合は普通に学校に行けたの。真ちゃんを責めるつもりはないけど、その時、真ちゃ
んは私の話をちゃんと聞いてくれなかった」

「…そうだね、ごめん。あの時は仕方なかったんだよ」

「心細くて、さみしくて、一回だけでいいから慰めてほしいって林さんに言ったの」

「で、一回じゃ済まなくなったわけだ？」

「そう。私がね」

「どういう意味だ？」

「ねえ、私たち結婚前も含めるとこれまで何年付き合ってる？」

「14年ほどになるね」

「その間いっぱいエッチしたけど…」

「したけど？」

「真ちゃんは私が潮を吹くってこと知らないよね？」

美帆の衝撃的な告白に真一は節句した。

「話を続けてもいいかな？」

真一の頭の中は真つ白になり、体も震えてきた。正直そんな話は聞きたくもないけれど聞
かないわけにもいかない。

「ああ…続けていい」

「林さんは特別アレが大きいとか、経験が豊富とか、エッチがすごく上手ってことでもな
いと思う。ただ、すごく優しくてじっくりしてくれるの。そして最初に林さんに抱かれた
時、私、潮を吹いたの。そんなの初めての経験で私もびっくりした。すごく気持ち良くて
何度もいったの。今まで知らなかった世界を知った感じだった」

真一は自分自身の男としてのプライドがガラガラ崩れる音が聞こえたような気がした。

「真ちゃんとのエッチももちろん気持ち良かったし、セックスってこんなものなんだろう

と思っていた。私は真ちゃんと出会う前もそんなに多くの男の人を知っているわけではなかったし、まさかあんなに深い快感があるなんて今まで知らなかった。女に生まれて良かったって初めて思ったの。真ちゃんには酷な話だろうけどそれが事実」

真一はまるで自分がヘビー級のボクサーにコーナーに追い詰められてパンチの連打をくらっているような感覚を覚えた。

「だから林さんとホテルに行くとかタタタになる。何度も何度も…」

「もういい！」

「ごめんなさい…」

「で、林なしではいられない体になってしまったというわけか？」

「…」

美帆は無言のまま答えない。凶星なんだろう。

「美帆は自分の浮気を俺に公認しろとも言いたいのか？全く馬鹿げてる。そんなことできるわけがないだろ！」

「そうだよね…」

「別れると約束できないのなら離婚するか？」

そう言うてはみたものの、今の真一の本心ではない。それは美帆にも見透かされていたかもしれない。

「真ちゃんはとてもいい旦那様。今でも大好きだし、頼りにしてる。小百合もかわいい。今、私はこの生活に満足しているの。幸せなの。絶対失いたくない。でもこの年になって初めて知った女の喜びも捨てたくない。じゃあどうしたいのか？って聞かれても答えられないけど、これが私の正直な気持ち。真ちゃんはもうこんな私とは離婚したい？」

真一は困惑した。真一自身も答えを持っていないのだ。美帆は元々控えめな性格で、自分を強く主張するタイプではない。それが原因で損をすることも度々あっただろう。そんな美帆にこんなことを言わせてしまう林に真一は嫉妬した。

「勝手なことを言うな！」

返答に窮した真一は席を立ち、その場から立ち去ろうとしたところを美帆が呼び止めた。

「林さんのことは死ぬまで隠し通すつもりだった。だからそれ以外のことは全部ちゃんとやってきたつもりだし、それなりに努力もしてる」

「美帆がいつもがんばってるのは俺も知ってるよ。でもそれとこれは別の話だ」

「そうね。今、私ひとつだけ決めたことがある」
「何？」

美帆は真一の目をまっすぐに見つめて言った。

「もしも真ちゃんが林さんに何かしたら離婚します。それから、林さんは毎月10万円別れた奥さんに娘さんの養育費を送っているのでお金は持ってないから」

「それは小百合のことも考えて本気で言っているんだらうな？」

「はい…。ごめんなさい」

真一は何も答えず、逃げるように書斎にこもった。

どうしたらいいかわからず途方に暮れている真一に対して、美帆はきっぱりと覚悟を決めたようだ。おまけに、林に知らせたら離婚する、そして林に慰謝料の請求もしてくれなると釘まで刺してきたわけだ。以前の美帆だったらこんな凶々しいことは決して主張しなかっただろう。真一は美帆にとって林の存在がいかに大きなものなのか改めて痛感した。

ひとりの男として、美帆の夫として、小百合の父親として、今自分が進むべき道はどこなのか。そんな大事なことも見つけられないでいる自分が情けなく、恥ずかしかった。

ただ、そんな真一もひとつ決めたことがある。それは林に対して真一が何らかの形で罰を与えたり復讐しようするのはやめておこうということ。憎くてたまらない相手ではあるけれどそれはしない。だってそんなことをする自分にはあまりにもみじめすぎるから。

偶然のこととはいえ、開けてはならないパンドラの箱を開けてしまったことを真一は後悔していた。もしもあの時、美帆のスマホの音が鳴らなかつたら、そしてあの雨の日に美帆を尾行していなかつたら、真一がこんなに苦しむことはなかつただろう。たとえそれが偽りの幸せであったとしても、今の苦しみよりはずっとマシ、いや、知らないのだから幸せなまま日々を過ごしていたに違いない。特に娘の小百合のことを考えると、間違いなく知らない方が幸せだったと言えるだろう。

翌日になっても、3日経っても、1週間経っても真一に答えは見つからなかった。結局、美帆の要求は、今の生活は変わらず続けながら、自分の浮気には目をつぶってほしいというあまりにも身勝手なものだが、真一はそれを一方的に美帆のエゴだと退けきれなかった。それは、自分もつとつと美帆をひとりの女性として愛してあげていたら、きっとこん

なことにはならなかっただろうと思うから。

そして林に対しても憎くてたまらない気持ちの一方で、男としての負けを認めざるを得ないところも感じていた。だからこそ、勝てなかった相手に遠くから石を投げるようなみじめな卑怯者だけにはなりたくなかったのだ。

美帆と林の密会はおおむね1ヶ月に1回のペースだったようだ。そして、美帆と話をしてから最初のその日が近づいて来た。もちろんその間も何事もなかったかのような偽りの日々は続いている。

あの日以来、美帆と林の話は一切していないし、美帆からも何も言ってこない。あのとき何も決められなかった真一に対して、どうすればいいのかわからないと言いながらも自分の意思はしっかりと示した美帆。美帆はまたこの火曜日にも林と会うのだろう。

結局、真一が美帆に何も言い出すことができないまま、その日を迎えることになった。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

その日の朝、美帆は真一と目を合わせようとしなかった。

会社に行っても、今頃ふたりは…と考えると仕事にも身が入らない。『俺は認めたわけではない。ただ、結論を出すのに時間が必要なだけだ』真一はそう考えることで自分を納得させるしかなかった。

その夜の美帆はいつにも増して疲れているようだった。きっと真一にバレてしまったことでいつも以上に激しい逢瀬になったのだろう。

ぐっすりと眠っている美帆の寝顔を見ながら真一はつぶやいた。

「俺は認めたわけじゃないからな」

それからまた1ヶ月後の夜。

「認めたわけではないよ。ただ時間がかかっただけだから」

「わかってる」

「ところで、林には俺にバレたことは話したのかい？」

「話せないよ。そんなこと言ったら林さんは私から離れていってしまう」

「じゃあ、美帆は俺が林に言う心配はしていないの？」

「真ちゃんはそんなことしない人だと思ってるから」

「そんなのわかんないぞ」

「真ちゃんはプライドが高い人だから。それは私が一番よく知ってるつもり」

「見透かされてるんだな」

「そうよ。お見通しなの」

「美帆は林に出会ってなんだか強くなったな」

「そんなことないよ。今だって苦しいよ。私だって苦しいの」

美帆の目から涙がポロポロこぼれた。

「泣きたいのは俺の方だよ。俺なんかプライドをズタズタにされたんだぜ。俺の方がずっと苦しいさ」

「そうだよね、そうだよね…」

そう言って美帆はまた涙をこぼした。

次の火曜日の朝、美帆の様子がいつもと違っていた。何か思いつめたような表情で、ぴりぴりした緊張感が漂っている。『もしかしたら?』と真一は思ったが、あえてそれを美帆

に確かめることはしなかった。

「ただいま」

その日、真一がいつもより早めに帰宅すると、玄関に娘の小百合が走り寄ってきた。

「おかえりなさい。ママ、今日ずっと泣いてるの。悲しいことがあったんだって。でも大丈夫だから心配しなくていいよって」

キッチンで夕食の用意をしていた美帆は目を真っ赤に泣き腫らしていた。

「おかえりなさい。あとで話すね。全部」

「わかった。お、今日は小百合の好きな唐揚げじゃないか!」

夫婦の寝室にはベッドがふたつ。

ふたりそれぞれのベッドに腰掛け、美帆が今日の出来事を話し始めた。

真一に問い詰められた時は林と別れないと啖呵を切った美帆だったが、やはりずっと真一に申し訳ないという罪悪感がくすぶって毎日が辛かったそうだ。自分がどれだけ身勝手なことを無理に通そうとしているのかもよくわかっていたと。散々悩んだ挙句、どうなっ

しまうか予想がついていながらも美帆は林に正直に打ち明けたのだった。

ホテルの部屋に入って開口一番、美帆が言った。

「私たちのこと、夫にバレちゃった」

「えっ、本当かい？僕が何かへマをした？」

さすがに普段冷静な林も動揺を隠せない。

「ううん、林さんのせいじゃない。私の不注意」

「旦那さんにぶたれたりしなかった？」

「それはないよ。うちの旦那はそういうことはしない人なの」

「そうか、そうなのか…」

林はうつむいてこぶしを握りしめた。

「もしかしたら、今日会ってることも？」

「知ってます」

林は『ふーっ』と大きなため息をついてしばし天を仰ぐと、美帆の目を真っ直ぐに見つめて言った。

「わかった。仕方ない。残念だけどもうこれつきりにしよう」

林は以前から、美帆の家族に少しでも迷惑がかかるようなことがあつたら、すぐに身を引くと言っていたのだ。

「いや！私たちのこと、夫に認めさせるから」

「そんなことできるわけない。旦那さんにもプライドがあるんだし、小百合ちゃんが苦しむ」

林はその場で美帆と連絡していたSNSのアカウントや登録されていた美帆の携帯番号を削除し、美帆にも目の前で同じことをさせたそうだった。

人妻との浮気がバレた男は、夫からの仕返しや慰謝料の請求が怖いはずだ。でも林は、それよりも本当に家族や小百合のことを心配していたらしい。真一は林とは一度、ほんのちよつと言葉を交わしたただけだったが、確かに彼ならそう考えそうだと思った。

話している間もずっと美帆は泣いていた。

「そうか、辛かったな」

「うう…」

「こっちにおいで」

真一は泣き崩れる美帆を自分のベッドに呼び寄せ、優しく頭をなで、抱きしめた。

それから10日ほど後、たまたま仕事で品川方面に来ていた真一は、特に理由はないが林のいるドラッグストアをのぞいてみた。林の姿は見当たらない。と、こないだへまをしたアルバイト君が見つかったので声をかけてみた。

「林店長は休憩中ですか？」

「いいえ、林店長は先日退職しました」

「え？異動とかではなく？」

「ええ、突然ご兄弟の介護が必要になったとのことで。つい数日前です。林さんに何かご用でしたか？」

「いえ、特に用は…。そうだったんですか。ありがとうございます」

《なんてやつだ。美帆との関係を完全に切るために仕事を辞めやがった。あの年で再就職は大変だろうに…》

きつと携帯の番号も変えてしまっているんだろう。林は決して逃げたのではなく、美帆のために姿を消したのだと真一は思った。訴えられたり慰謝料を請求されるのをおそれたという見方もあるだろうが、林は自分がきつぱりと身を引くことで、美帆と家族をこれ以上混乱させないように彼なりの筋を通したのだろう。きつとそうだ。

そんなことを考えながら突っ立っていた真一に店員が声をかけてきた。

「何かお探ですか？」

「え？あ、あの、最近疲れ目…じゃなくて、いえ、ちょっと風邪気味で…」

「風邪薬はこちらです」

40代の疲れ目用目薬は二つも三つも必要ないが、風邪薬なら余計に常備しておいてもいいだろう。真一は目についた風邪薬を一つ購入して店を出た。

会社に戻るために駅に向かう途中、なにげなく目にとまった一軒のケーキ屋に真一は立ち寄った。多くのお客さんで賑わう人気店のようだ。真一はそこで見た目が少し豪華で上等なケーキを3ピース買った。

ひとつは娘の小百合に、
ひとつは甘党の自分に、
そしてもうひとつは愛する妻、美帆のために。